

4 年 1 組 国語科学習指導案

場 所 4 年 1 組教室

1 単元名 新美南吉の表現を味わい，続き話を書こう

2 教材名 ごんぎつね（新美南吉）

3 単元のねらい

【関心・意欲・態度】

・「ごんぎつね」の登場人物の心情を読み取ろうと熱心に考え，図書館等の新美南吉の物語を進んで読んだり，「ごんぎつね」の続き話を進んで書こうとしたりしている。

【読むこと】

・場面の移り変わりに注意しながら，ごんや兵十の気持ちの変化，情景などについて，叙述をもとに想像して読むことができる。

・読み取ったことを発表し合い，自他の考えの違いや仲間のよさに気づくことができる。

【書くこと】

・ごんや兵十の気持ちを読み取り，「ごんぎつね」の叙述から根拠を明らかにして，続き話を書くことができる。

・続き話を読み返し，文章の間違いを正したり，自分の表現したい心情をより明確に記述しているかを検討して書き直したりすることができる。

・続き話を発表し合い，書き手の考えの明確さ等について感想や意見を述べ合うことができる。

4 単元における主な言語活動 小学校学習指導要領解説 国語編 p 66 より

「読むこと」の言語活動例のア 物語や詩を読み，感想を述べ合うこと。

文学的な文章を読み，感想を述べ合う言語活動である。

一冊の本だけでなく，同じ主人公や作家，詩人のシリーズ，ファンタジーのシリーズなど，物語集や詩集などにも読書範囲が広がるようにする。自分の感想を明確に表現するためには，低学年で指導したものに加えて，「感激する」，「上手に説明している」などの感想の言葉を増やすことが求められる。また，感想が本や文章のどの叙述に基づいているのか，自分が現実に経験したこと，普段考えていることや関心のあることなど，どのように関連しているのかなどを説明することも必要となる。感想を述べ合ったら，自分の感想が，友達の感想と比べてどのような特徴をもつのかを認識させていくことが大切である。

5 本単元のねらいに関わる児童の実態

(1)関心・意欲・態度（○：できている □：課題である）

○ 1 学期の単元「本と友達になろう」では，多くの児童がファンタジー作品に興味をもち，「車のいるは空のいる」シリーズのはじめ，あまんきみこの作品を進んで読む姿が見られた。

(2)読むこと（○：できている □：課題である）

○ 読み取りの視点を活用して，主人公の気持ちを読み取ることができる児童が多い。

○ 本文の内容から根拠を明らかにして自分の考えをもつことができる児童が多い。

□ グループ交流時，「自他の考えの相違や仲間のよさを見つけること」が苦手な児童がいる。

(3)書くこと（○：できている □：課題である）

○ 興味をもって書き，自分の思いなどを明確に伝えようと工夫して書ける児童がいる。

□ 自分の書いたものを仲間に紹介することはよくできるが，それについて感想や意見を述べることは消極的であり，自分の思いを相手に分かりやすく伝えようという意思が弱い。

6 研究テーマに関わって

(1)学習のユニバーサルデザイン化

ペア・グループ交流の位置付け

・児童の課題である「自他の考えの相違や仲間のよさを見つけること」の克服を目指し，全体交流の前に，少人数という利点のあるグループ交流を位置付けた。

登場人物の関わりを視覚化する掲示資料の工夫

- ・ どんと兵十の関わりを見ただけで理解できるように、両者の関係を図式化する。
 - ・ 新美南吉の表現の工夫例を掲示として示し、続き話を書く参考にする。
- 読み取りの視点の提示
- ・ それぞれの場面の読みで、「心情、行動、台詞、情景描写、心内語、時間・距離」など、読み取りの視点を提示し、それを手がかりに「一人読み」が進められるようにする。
- ワークシートの構造化・優れた表現の記録シートの作成
- ・ ワークシートの上段に本文、下段に自分の考えを書く欄を設けて、「自分の考え」と「本文の根拠」を明確化する。
 - ・ 自分がよいと思った新美南吉の表現を書き留めておけるワークシートを作成する。

(2) 協同的に学ぶ合う学習集団の育成

ペア・グループ交流の仕方の指導

- ・ グループ交流では、相手の考えを聞いて自分の考えと比べようとする態度、根拠となる本文の叙述を明らかにした発言方法、相手の発言内容を受け止める態度などを指導する。

(3) 言語活動の充実を目指した単元指導計画の在り方

指導事項及び言語活動を系統的・発展的に配置した年間指導計画（年間）

- ・ 1 学期には「本と友だちになろう」の学習で、物語を読んで感想を述べ合う学習をした。本単元では、新美南吉の表現のよさをじっくりと読み味わい、本文の叙述に基づいて続き話を書く学習を行う。
- 第 3 次を中心とした言語活動の充実（各単元）
- ・ 第 3 次では、第 2 次で学んだ優れた表現を生かしながら、作品の雰囲気壊さないように続き話を書き、書いた話を交流して感想や意見を述べ合う言語活動を行う。
- 習得・活用のサイクルを生み出す系統的・発展的な単元構成
- ・ 本単元は「新美南吉の表現を味わい、続き話を書く単元」である。そこで、第 1 次では、新美南吉の生い立ちや主な作品を紹介し、作者や作品に対する児童の興味関心を引き出す。第 2 次では「ごんぎつね」等の作品を読み、情景描写や登場人物の行動描写等、優れた表現方法を習得させる。習得した表現方法を活用し、第 3 次の続き話を書く活動を行う。

(4) 協同的な学び合いを通して、読みや表現を深める授業の在り方

児童が見通しと自分の願いをもち、学習の場を振り返る場の設定

- ・ 各自がめあてをもって一人読みや交流を行い、授業の終末で振り返りをする。
- 言語活動の充実を目指した工夫改善
- ・ 本時の場面は、物語の最後の 6 場面である。ごんを撃った後の兵十の心を占めていたのは「ごんの行動を知った驚き」と「何も知らずにごんを撃ってしまった後悔」という二つの気持ちだったと授業者は読み取った。この二つの気持ちの強さや深さを読み深めさせたい。
 - ・ 「驚きの強さ」は、「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」という記述から読み取らせる。ここでは倒置法が使われている。倒置法の有無を比較させ、驚きの強さを読み取らせたい。
 - ・ 「後悔の深さ」は、「火なわじゅうをばたりと取り落としました。」という記述から読み取らせる。手立てのひとつは、「動作化」である。動作化の後、感じたことを話させる中で、後悔の深さを読み取らせたい。
 - ・ 最後の一文「青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。」が、物語の結びとしてどのような効果があるのか、考えさせたい。「結びの一文の有無によって、作品の雰囲気が大きく変わること」を、音読させることで、実感させる。
- 協同的な学び合いを生み出す指導・援助の工夫
- ・ 「一人読み」の後のグループ交流では、友だちと自分の意見を比べられるように、友だちの意見を聞いた後に必ず感想を言うように指導する。

(5) 他の活動との関連

日記における描写の導入

- ・ 日記を書く際、行動描写や情景描写等、本単元で学んだ表現の工夫を生かして書かせる。

7 単元指導計画（全 20 時間）

時	主な学習活動	指導・援助
1	本時の課題を確認する。	「ごんぎつね」の続き話を書くことを伝える。 新美南吉の表現方法に多く触れるため、単元と並行して読書を促す。 難語句や物語の時代背景特有の語句を調べ、ノートに書かせる。
2	単元の学習の見通しをもとに、 単元の学習の見通しをたてる。	
3	本時の課題を確認する。 「ごんぎつね」を書いた新美南吉は、どんな人だろう。 作者の説明を聞き、読み聞かせの感想を交流する。	
4	本時の課題を確認する。	読み聞かせの時、読み取らせたい表現を強調したり、ゆっくり読んだりして、大切な表現が多くあることに気づかせる。 感想・疑問・話し合いたいことの 3 観点に分けて板書し、各場面の課題と疑問や話し合いたいことが視覚的に分かりやすいようにする。
5	「ごんぎつね」の初めの感想をもとに、読み深めたいことを話し合おう。 範読後、感想・疑問・話し合いたいことを書き、交流する。	
6	本時の課題を確認する。	
7	ごんは、どんなきつねか、読み取ろう。 「一人読み」の後、グループ・全体交流をする。	ごんを中心とした関係図を活用し、ごんの性格や気持ち、それが分かる文が視覚的にとらえやすいようにする。 関係図と挿絵を活用することで、ごんの性格をイメージしやすいようにする。
8	本時の課題を確認する。	
9	兵十のおっかあが死んだことを知ったとき、ごんはどんな気持ちだったか、読み取ろう。 「一人読み」の後、グループ・全体交流をする。	
10	本時の課題を確認する。	「なぜこんで」「かけもどりました」に注目させ、3 場面の前半は思いつきで、後半は同じ間違いをさけるために考えた行動であったことを、全体で確認する。 前半と後半のごんの気持ちの違いを考えさせる。
11	いわしを投げ込んだ時や、くりやまつたけを持っていた時、ごんはどんな気持ちだったか、読み取ろう。 「一人読み」の後、グループ・全体交流をする。	
12	本時の課題を確認する。	
13	ごんはどんな気持ちで兵十と加助の後をついて行ったのか、読み取ろう。 「一人読み」の後、グループ・全体交流をする。	会話文や心内語、音で表現された情景を手がかりに、ごんの気持ちを読み取らせる。 「かげぼうしをふみふみ」の距離を実演させ、「なぜそんな近くをついて行ったのか」と発問する。
14 本時	本時の課題を確認する。 ごんを撃った兵十はどんな気持ちだったか、読み取ろう。 「一人読み」の後、グループ・全体交流をする。	
15	本時の課題を確認する。 兵十はどんな人物か、本文から読み取ろう。 「一人読み」の後、グループ・全体交流をする。	
16	本時の課題を確認する。	「続き話」は兵十の視点で進むことを説明し、課題提示につなげる。 「ぼろぼろの黒い着物」「大きなほくらみたいに～」から、生活のために懸命に働く兵十の人柄をどう思うか、発問する。
17	「ごんぎつね」の読み取りをもとにして、続きはどうなるかを考えよう。 今までの読み取りや表現方法を振り返る。 続き話を考えて書く。	
18	本時の課題を確認する。	
19	続き話を発表し合い、自分の作品を見直そう。 続き話をグループ交流し、アドバイスをもとに見直す。	推敲のため、人数分、作品を印刷して配付する。 「ごんぎつね」の世界観と合っているか、さらにふさわしい表現がないかを考え、アドバイスをする。
20	本時の課題を確認する。 自分たちの考えた続き話を発表し合い、感想や助言の交流をしよう。 グループ交流の後、全体交流をする。	

並行読書（新美南吉の表現方法集め）

8 本時のねらい

「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」「ばたりと取り落とした」などの兵十の言動から、ごんを撃った兵十の驚きと後悔の気持ちを読み取り、最後に二人の気持ちを通じ合えたことに気づくことができる。

9 本時の展開 (1 4 / 2 0)

過程	主な学習活動	指導・援助
つかむ	課題を確認する。 ごんを撃った兵十はどんな気持ちだったか、読み取ろう。 各自「個人のめあて」を決め、ノートに書く。 範読を聞きながら発問に答え、ごんが撃たれるまでの二人の気持ちを読み取る。	「個人のめあて」をノートに書かせ、授業に臨ませる。 内容理解のため、発問に答えさせながら範読する。特に、引き合わないと感じながらもくりを届けるごんの気持ちを詳しく取り上げ、「償いをしたい」というごんの気持ちが強くなっている」という考えを引き出す。
考える・広げる	ごんが撃たれた後について、一人読みをする。 グループ交流をする。 全体交流をする。 ごんの気持ち ・兵十に償いがしたい。 ごんは、ばたりとたおれました ↓ 兵十はかけよってきました。 ↓ 土間にくりが～目につきました。 ↓ ごんに目を落としました。 ↓ ごんは、ぐったりと～ ↓ 取り落としました。 兵十の気持ち ・やった、しとめたぞ。 ・いたずらはされていないだろうか。 ・なぜくりがここに。 ・まさか、おまえがくりを届けてくれたのか。 ・やはりそうだったのか。 ・何てことをしてしまったんだ。 ・すまない、ごん。 兵十がごんの償いを知ったことで、二人は分かり合うことができた。	一人読みの時には、「読み取りの視点」を活用して、叙述に沿った読み取りをするように伝える。 読み取りが苦手な児童には、読み取らせたい表現をいくつか提示する。 行動：「かけよってきました。」 「びっくりして目を落としました。」 「目をつぶったまま、うなずきました。」 「ばたりと取り落としました。」 台詞：「おや。」 「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」 (倒置法) グループ交流時には、司会を一人おき、全員の意見交流が短時間で終わるように3人1グループで行う。 黒板を上下2分割し、ごんの気持ちと兵十の気持ちの変化と関係が分かりやすいように板書する。 ごんと兵十の心の距離を図式化したものを移動黒板に貼り、今までの二人の関係と比べられるようにする。 ごんと兵十の心の距離を表す関係図をもとに、「二人の心は離れたままですか」と発問し、二人が分かり合えたという意見を引き出す。
深める	「青いけむりが～」の一文について話し合う。 ・二人の悲しい気持ちが強調されている。 ・青いけむりはごんのたましいだと思う。だから、ごんは天国に行ったと思う。 ・作品自体が、悲しい終わりになると思う。	最後の一文を省いて読ませ、どちらがよいかをもとに考えさせる。 「最後の文があると、どんな雰囲気になりますか」と発問し、作品に余韻を残していることに気づかせる。
まとめる	第2次の振り返りをする。 ・ごんはいたずらぎつねだけど、一生懸命償いをしたから、好きになりました。死んでしまったのがとてもかわいそうで、悲しくなりました。でも、ごんは最後に兵十に分かってもらえてうれしかったと思います。	全場面の読み取りを通した感想をノートに書き発表する。ごんが死んだ終わり方の切なさを感じて記述している児童を指名し、雰囲気を壊さない「続き話」を書くことを説明する。